

真珠（詳細版）

何世紀もの間、真珠は伊勢志摩の郷土史や地域文化の重要な一部を成してきました。伊勢志摩国立公園は今日、養殖真珠のふるさととして知られています。前世紀に行われた伊勢志摩での真珠養殖の開発は有力な産業を創出しました。現在、伊勢志摩の真珠の品質は世界中で認められています。

近代以前の日本では、真珠は薬の原料に使用されていました。真珠の粉は、目の病気から熱に至るまで、様々な病気の治療に役立つと信じられていたのです。当時は、海女として知られる女性ダイバーたちが海産物と一緒に天然の真珠貝を探していました。ただ、天然真珠は偶然によってしかできません。希少であるため、かなり高価な原料であり、「人魚の涙」と呼ばれていました。

『真珠王』としても有名な御木本幸吉（1858～1954）は鳥羽の飲食店主の息子として生まれました。最初は、1888年に英虞湾の神明浦で真珠養殖を試み始めました。2年後には、さらに相島でも養殖を開始しました。1892年、英虞湾に藻の大発生によって起きた赤潮によって、御木本の真珠貝の大半が死にました。これにより、相島にあるわずかな貝のみ残されました。真珠養殖の試みを再開した翌年、相島の貝を開けると、貝殻にくっついた真珠が5粒できたことを知りました。この半円真珠は世界で初めて養殖に成功した真珠であり、真珠養殖技術の大きな第一歩を表すものでした。

他にも、見瀬辰平（1880～1924）、西川藤吉（1874～1909）という2名の研究者の尽力により、最初の完全な球形の養殖真珠が作られました。こういった開発に対応するため、御木本は鳥羽の相島で真円真珠の生産を始め、事業を拡大していきました。

伊勢志摩の美しい景観を愛していた御木本は、伊勢志摩を国立公園にしようとする運動を支援してきました。第二次世界大戦前から、彼は地元の有力者や組織と一緒に日本政府にロビー活動しました。彼の願いは1946年に実現します。

真珠養殖の初期段階では、母貝となる貝を見つけることや、核入れをした貝を海に戻すのは海女の仕事でした。その後、真珠の養殖いかだが開発されました。この筏には養殖かごが取り付けられており、養殖の作業はより効率的になりました。今日、英虞湾などに浮かぶ養殖いかだは、伊勢志摩を代表する景観の一つになっています。

現在、伊勢志摩では観光客は自分で貝から養殖真珠を取り出す体験ができるワークショップがあります。核入れの作業を見学したり、真珠養殖の歴史についてさらに学んだりできる施設があります。伊勢志摩の真珠店では、地元産の真珠や、真珠を使ったものなどを買うこともできます。

核は真珠貝の母貝に入れられます。真珠貝は真珠層（真珠を形成する液体）を核の周りに分泌します。養殖真珠が取れるまでは、核入れからだいたい1～2年かかります。

真珠は養殖が難しいです。特殊な条件を必要とするからです。伊勢志摩の湾は、この特殊な条件を満たします。真珠貝には安定した流れと強風からの保護が必要です。栄養分としてプランクトンも要ります。また、真珠養殖者はひとつひとつの貝の状態にも注意しなければなりません。例えば、水温が下がったら、もっと南の湾に貝を移さなければならないためです。

英虞湾や五ヶ所湾、伊勢志摩にあるその他の場所の入江は穏やかであるため、真珠貝が繁殖できます。志摩の『新しい里海のまち』プログラムが、この豊かな自然環境を次世代のために守るのに役立っています。